批評・紹介

鄭利華著 王世貞年譜

楊 文信

一 王世貞年譜の編纂史略

王世貞と言えば、明代中晩期の史學・文學史上大きな足跡を殘した人物として名高い。王世貞年譜の編纂史、即ち彼の年譜の補訂・修正の歴史は、明の「古文辭」派――特に「後七子」――に對する清初期以來の詩文壇における評價の高下に呼應していたと言える。

明の嘉靖より萬曆年間にかけ、王世貞・世懋兄弟を中心として、「瑯琊王氏」が太倉の名族として名をはせていた。その最も重要な原因は、世貞を領袖とする「古文辭」派が晩明の文壇に強い影響力を持ったことにある。しかし、初めて世貞の年譜を編纂したのは彼の同時代の親友門人ではなく、世懋の孫の瑞國であった。瑞國の『瑯琊鳳麟兩公年譜合編』（東倉書庫鐫刻本、以下『合譜』）は順治一七年（一六六〇）に書き終えられ、康熙五二年（一七一三）に子の良穀による校訂も終ったが、そのまま祕藏され、光緒二七年（一九〇一）になって初めて刊行されることになった。刊行の遲延は費用の問題もあるが、「古文辭」派の勢力が錢謙益等の強い攻擊によって凋落し、また歸有光を祖と奉じる清代文壇の主流、桐城派の文學主張と合わないために、輕視されたのが、その根本的な原因である。(1) 一方、恐らく『合譜』のことを知らなかったからであろう、考證學の大家である錢大昕は乾隆五一年（一七八六）に『弇州山人年譜』（以下『錢譜』）を編纂した。『潛研堂集』より見れば、錢大昕は世貞の詩文のスタイルを好むはずもなく、彼の著作の誤謬を批判しているが、その才能の高さは認めて、同地域の先輩として尊敬していた。(2) 『合譜』と『錢譜』はいずれも世貞兄弟の詩文に基づいたものであるが、『錢譜』は『合譜』より後に編纂されたにもかかわらず意外にも粗末なものであった。

清末以降、王世貞年譜の編纂は一九三〇年代と七〇年代に二度の頂點を迎える。一九三一年、吳晗は「清明上河圖與金瓶梅的故事及其衍變――王世貞年譜附錄之一――」中、『錢譜』の記載が簡略にすぎるため、凡そ四・五萬字の新年譜を作った、と述べているが、朱星が疑うように、恐らくこの年譜は未完成であった。(3) 吳晗に引き續き、黃如文は三八年に「弇州先生文學年表」（以下「年表」）を記した。「年表」は文字通り、主に世貞の文學活動を扱うものであるが、他の事跡にもしばしば筆が及んでいる。先行する年譜類と比べれば、この「年表」は初めて世貞以外の人の詩文集を利用し、『明史』・『錢譜』の誤りを指摘するなどの長所を備えているが、その反面、胡應麟の卒年を萬曆一六年（一五八八）とするなどの大きな誤りも犯している。(4) 「年表」の後、王世貞研究は約三〇年間の低迷期を經て、七〇年代の臺灣で再び高まった。まず第一に七一年の姜公韜『王弇州的生平與著述』（臺灣大學修士論文）、續いて七六年の許建崑『王世貞評傳』（東海大學修士論文）と黃志民『王世貞研究』（政治大學博士論文、以下『研究』）が發表された。

姜氏の論文は年譜の代りに、略傳の形式で世貞の事跡を紹介したものであった。ところが、この後、人物研究の最も基本的な作業と言える年譜の役割が次第に學界において重視されるようになってきた。この傾向は許・黄兩氏が年譜を論文の中心部分としたことからも窺われる。三論文中、『研究』は世貞の事跡と著作に關して最も廣汎に言及しており、當時の代表作と言える。一方、八〇年代には中國大陸の徐朔方氏が「古文辭」派と世貞の重要性を認め、「論王世貞」で自作の世貞の未刊年譜を註に引用している。だが本稿の執筆時點では、その出版事情の詳細は不明である。(5)

こういった狀況下、一九九三年に鄭利華氏『王世貞年譜』（以下〝本書〟）が出版された。この著作により、譜主の研究は再び大きく進展したのである。

二　鄭利華『王世貞年譜』の紹介と評價

本書の構成は次の通りである。

(一)　章培恆『新編明人年譜叢刊』（以下『叢刊』）序
(二)　著者『王世貞年譜』序　一―二頁
(三)　凡例　三頁
(四)　世系簡表(一)(二)　四―五頁
(五)　傳略　六―二五頁
(六)　年譜　二六―三四八頁
(七)　引用資料目　三四九―三五四頁

本書は上海復旦大學古籍整理研究所の章培恆氏を主編とする『叢刊』の一種である（ほかに陳正宏『沈周年譜』や陳麥青『祝允明年譜』、陳應宏『鍾惺年譜』などがある）。氏の序文によれば、このシリーズは一九八六年から八八年にかけて同研究所の修士論文に基づいて補訂を加えたものであり、「譜主であるこれら明代の著名人たちに對する系統的な研究はまだない」との認識に基づき編纂された。本書の著者の鄭利華氏は一九六二年の生れ、同研究所の修士・博士號を取得して、現在は同研究所に勤務されている元明清文學の研究者である。九五年四月に、氏の博士論文『明代中期文學演進與城市形態』も同大學の「博士叢書」として出版されている。

さて、著者が「凡例」で述べているように、本書は王世貞の政治と文學思想・官途・學問・交際・性格・趣味諸方面を通して、彼を研究するための基本資料を提供した上で、その歴史上の位置及び「後七子」という文學流派の當時の狀況を考察し、その背景にある明代中期の社會文化の理解に役立てようとする試みである。本書の「年譜」の骨子部分はすでに九〇年『明代文學研究』に同じ題目で掲載されているが、(6)今回の出版にあたっては、先の「年譜」の前に「傳略」を添加し內容の補充を圖ると共に出典を逐一示した結果、分量も大幅に增加している。本書を通讀して第一に受ける印象は、著者がよく『弇州山人四部稿』と『續稿』を精讀しているということである。世貞は楊愼と並び明代における最も著述の多い人物で、例えば詩文集だけでも三百卷に近い膨大なものが殘っている。これら全てを通讀するにはそれ相應の時間を要するはずである。特に明代史研究の場合、楊廷福・楊同甫編『清人室名別稱字號索引』のような便利な工具書も編纂されていないので、詩文中に表われる字・號によって人物の原名と事跡を考證するのは容易なことではない。

體例に關して言えば、本書は通常の年譜類とほぼ同樣、月單位で譜主の事蹟を記す。月の下に大字で主な事項とその出典を擧げ、細

字で原典を引用し、その疑問のある箇所を次の案語で説明し、關係人物の略傳とその資料を紹介している。どの月に繫けるか確定できない譜主の事跡と若干の重要な時事については、各年度の最後に列擧している。案語は一二六項あり、多くは詩文の創作（他人の作品も含む）された時間と關係人物の事跡の考證である。『合譜』の編者は時折、世貞が記している詩文の執筆時が事實と符合しないことを指摘するのみで、考證は行っていない。本書の一三頁や一八九・二一二―二一四頁などでは、年月記載の誤りについて初めて考證している。梁有譽・魏裳と世貞の交友開始の時期（六五頁）、宗臣（六九頁）・李攀龍（一一九頁）の官を辭した時期、劉景韶が貴州兵備の任に就いた時期（八七頁）、魏裳の卒年（二三六頁）、徐中行の文集の刊行時期（二八九頁）についても、本書によって明らかになることであろう。登場人物の略傳は三二四項あり、そのカバーする範圍はかなり廣い。『研究』と比べれば、それが注意していない顧允揚・袁祖庚・章美中・李孔陽・陸一鳳・應大猷・王鈇・梁孜・吳嘉會・吳嶽・樊獻科・宋大武・張希擧・李嵩・張師价・尤求・范應期・陸綸・葛綸・李鏈・胡維新・殷邁・王宮用・汪時元・沈愷・莫士龍・蔡範・董堯封・王頤・汪宗元・張崇倫・尙德恆・程拱宸・蔡一槐・馬願澤等々、おおよそ八〇以上の人物について本書は取り扱っている。彼らは從來の明史研究の視點より見れば、著名度ないし研究史の厚さに於いて祝允明・李贄・袁宏道などとは比較にならないが、そのほぼ半ばは進士や擧人の出身で、「古文辭」派の勢力が各地へ廣がる過程における役割の上で、或いは嚴嵩・高拱・張居正等の政壇の有力者と對抗する一つの文人集團の基盤として、充分研究の意味がある人物と思われる。

從來の王世貞に關する年譜は、彼自身の著作に重きを置くあまり、彼に對する當時の不評・反對意見といったものには言及しなかった。これに對し、本書は親友門生の記載も充分利用してそれらの事柄をも掲載しており、一歩進んだと言えるであろう。例えば萬曆八・九年の閒の、王世貞・王錫爵兄弟等は王憲貞（王錫爵の女）を師としてあがめ、死後仙人になったと大々的に宣傳したため、妖言惑衆のかどで他の官僚より彈劾された。このことについて、『合譜』では數行をさくのみであり、又、『研究』では世貞の著作のみを參考資料としたため、結局彼の立場に立った判斷を下すことしかできなかった。本書の二八四頁では、當時、調停の任に當った友人である徐學謨の手紙を引いて、徐氏も世貞たちの取った態度に不滿であったことを示している。また、二八八頁と三四〇頁では、門客であった屠隆と殷都の手紙により、晩年の世貞は道術を學ぶと明言しながらも、なお人からの詩文製作依頼に答え、又〝遊宴の會〟の主催及び參加を頻繁に行っていたことを指摘している。これは世間と沒交渉であることを願いながら、その一方で必ずしもそれを全うできなかった、彼の立場と複雜な心境を示す點で極めて重要である。三四六―三四七頁では、殷都・唐時升の記載をもって、從來空白であった萬曆一八年四月から冬までの世貞の生活を究明しようとしている。これによると、この前後の時期の彼は、年相應の圓熟味を增し對人關係も好ましいものとなった、とする通說とは異なり、「死生聚散」の苦しみに對する執着と怒氣を發する場合が多かったことが窺われ、これは彼がこの世を去る直前まで續いたようである。

參考資料に關しては、五十點にも及ぶ地方志を利用しており、言うまでもなく『研究』（十二點）よりも充實している。更に注目さ

れるのは、明中・晩期の詩文集の利用數が百點を越えており、『研究』（四十點未滿）を遙かに凌駕したことであろう。特に、黃姬水『黃淳父先生集』・章美中『章玄峰先生詩集』・徐文通『徐汝思詩』・徐師曾『湖上集』・徐桂『徐茂吳詩集』・王道行『桂子園集』・張九一『綠波樓詩集』・殷都『爾雅齋文集』・彭年『隆池山樵詩集』・龍膺『綸濕文集』・李春芳『貽安堂集』・吳稼澄『玄蓋副草』・馮汝弼『馮祐山先生集』・董裕『董司寇文集』のような、臺灣でも日本でも殆んど所藏されていない珍しい文獻も搜し集めた結果、本書の內容は豐富なものとなった。以上より、本書は今後の明代中・晩期における人物研究の參考すべき年譜として、利用されることは容易に豫想される。

しかし、本書も完全ではない。まず、先行研究や、關連する研究範圍の業績を把握しきれておらず或いは重視していないためか、「引用資料目」には民國以來の膨大な王世貞研究の業績について一點も擧げていない。たとえ外國の研究情況は知り難いとしても、張慧劍『明清江蘇文人年表』さえ參照し得なかったということは承服できない。[7] さらに、一次史料も更に補充の必要があり、特に吳國倫『甔甀洞續稿』・徐階『世經堂集』・劉鳳『子威先生澹思集』・陸光祖『陸莊簡公遺稿』・劉景韶『太白原稿』・王穉登『南有堂詩集』と『謀野集』などの關係資料を利用していないことは惜しまれる。年譜內の記事の遺漏に關しては、『研究』と比べて見ると、嘉靖三七・四二・四五年、隆慶二・四年、萬曆元・二・三・五・六・八・一〇・一二・一六年などの年について、四箇所或いはそれ以上世貞の重要な事跡を載せていない。また郭紹虞が紹介した、萬曆一四年に世貞が汪道昆兄弟と屠隆等の南屏詩社に參加したという項目も觸れるべきであったと思われる。[8]

私見を述べるなら、周知の史料でもより深く讀めば、新たな興味深い知見はまだ發見できる。常に注目される歸有光と王世貞との關係については、かねてから兩者の文學主張の相違にのみ注目が集まり、それ以外の視點から二人の關係を把握しようとする作業が缺如していた。これに對して、近年佐藤一郎氏は同時代の同鄕人という地域的な繫がりから二人の關係に關する新たな考察を行ったが、[9] 實は二人の微妙な關係は、その重複する交際圈にあると思われる。有光の鄕試の座主は世貞の座主と同じく張治であったし、有光の門人の王執禮（字は子敬）・陸汝陳（字は明謨）、友人の王世德（字は永美）は各々世貞の族人・親族・堂兄であった。有光の友人の陳文燭・俞允文・徐中行・周思兼たちもすべて世貞の友人であり「古文辭」派を代表する人物である。『震川先生集』には「西王母像贊」のほかに、歸氏が隆慶年間に世貞と交際した證據となる次の手紙二通が殘されている。「京口に至りて、曾て文字に委悉を具え、人を遣して鳳洲行省に送る」、及び「王元美大名より還りて、彼の撫公の意を致す、大略王少宰（王本固か）の云う所の如く、當に書院山長と作すべきのみ、と。方に爾くせんとせしに、次いで且つ元美の此の言を得、始めて復た行計を作す」である。また、有光は世懋と共に陳文燭の詩會に參加したこともある。[10] こういったことから見ると、晩年の有光が、世貞に對して對抗意識を抱きつづけていたという錢謙益の說は再檢討されなければならない。

以上のような分析を總合すると、先に提示した著者の執筆意圖からして、本書の重點は確かに世貞の仕宦・交遊・著作年代の考證に

置かれてはいるとはいえ、實際の所、その文學思想の全貌と變化さえ明らかではなく、ましてその興味・關心と思想の究明はあまりなされていない。周知のように、世貞は宋の王應麟、明の楊愼に比する博識家で、彼の興味・關心は書畫・金石草木・道敎佛敎・詞曲・諸子百家の典籍など廣きにわたっている。その中、從來から觸れられること最も少ない彼の思想、すなわち朱學を批判し王學を認める學問の立場は『四部稿』「箚記」・「宛委餘編」、『讀書後』の諸篇に窺われる。一方、『金瓶梅』の著者が世貞であるか否かという問題において、重要な鍵となる彼自身の山東方言や吳語に對する能力・理解の程度、又四〇代前後における生活とその中で創作にさかれた時間の問題――このことは『金瓶梅』が百卷に及ぶ大著であることを考えると十分に吟味するに値する問題である――そして彼の家藏している鈔本の傳承と王穉登・屠隆・徐階との關係も重要である。[11] だが、これらの問題は編年體の體例の限界もあって、本文に取り入れることは殆んど不可能である（この點に關しては次の章を參照）。

以上、本書の內容及びそこより生じる問題を簡單にまとめた。續いて、若干の訂正や補遺を要する箇所を列擧しよう。

一五頁　『明史』「王忬傳」の「秋防の事竣りて、就ち兵部右侍郎を加えらる。薊遼總督楊博朝に還り、卽ち忬を移して之に代う。尋いで右都御史に進む」（傍線は評者）を引用しているが、これは八九頁の『明實錄』・『滄溟先生集』の王忬が總督の任に就く前に兵部左侍郎・右都御史に任ぜられた記事とは矛盾している。これは、すでに黃雲眉が指摘している。[12]

四九頁　「張玉亭」を未詳とし、「玉亭」を字と考えている。『崇蘭館集』には同じ詩會で作った詩を載せられているが、題名は「同謝茂秦（榛の字）山人蔡子木（汝楠の字）太守張汝玉王元美（世貞の字）二比部過集吳峻伯（維嶽の字）比部宅卽席各賦得飛字」となっており、「玉亭」は張氏の號に違いない。また、『瞿文懿公集』に載せる「蕭山の張子汝玉實に命を奉じて江南に之く」という句から考えると、『蕭山縣志稿』に記載のある「張燭、字は汝玉、楓邱の仲孫、嘉靖甲辰の進士、刑部江西淸吏司を授け、戊申陝西司郎中に陞る」とは同一人物である。[13]

五五頁　「念二日」とは廿二日のことであり、從って「旋風破獄舍」は二十二日に繫けるべきである。

八二頁　謝榛と仲が惡くなった原因を、『列期詩集小傳』（以下『小傳』）の解釋を引用して述べているが、もとより、その解釋は十分かつ公正ではない。陳建華や廖可斌氏などが指摘したように、謝榛の詩文が粗俗になったことも原因の一つであるが、彼が庶民であって他の六子が進士であるという身分の違い、また謝榛が政界の有力者に取り入ったという事實も無視できない。[14] 當然、「古文辭」派に對する錢謙益の偏見もしくは惡評に十分な注意を拂わなければならない。

一〇二頁　『小傳』を引用して、「聖少」を名とする。しかし、これは二八五頁に引く世貞の「壬午元日與敬美（世懋の字）祝聖少飲卽事」、また『四溟山人全集』「中秋夜衞河泛舟同王元美顧聖少醉賦」という詩名上の表記からわかるように、顧氏の字である。『研究』ですでに紹介されている通り、顧氏の名は聖之、聖少・季狂はその字である。[15]

一五二頁　歸有光「項思堯文集序」を引用して、これを嘉靖四三

年に掛けているのは『研究』と同じである。しかし、文中の「(項子煥)余と京師に遇う」、また歸有光が子煥について「奇を懐いて未だ試せず」と言い、世貞を「妄庸巨子」と卑しめる内容を分析すれば、有光と子煥は世貞の文名がかなり高い時期、且つ會試の行われた年に北京で會ったはずである。つまり、この「序」は嘉靖二九か三二、三五、三八、四一年のいずれかの年に書かれたものであろう。特に後の方の年の可能性が高い。

一八三頁　「王復」が誰かについては未だ不明であるが、少なくとも名ではなく、「公暇」(周天球)・「子念」(曹昌先)等と同様、人の字である。

二二七頁　「於信夫」を「未詳」とする。『研究』も「信夫」を名と誤っている。『湖南通志』に「於文徵、字は信夫、武陵の人、嘉靖一九年の擧人」という記事があるが、これと合致する。[16]

二三三頁　「丘汝謙」を未詳とする。『研究』は彼の資料を擧げていない。詩題に「楚人丘戶部汝謙」とあり、また『王奉常集』「初秋日同諸名勝集丘謙之戶部席分韻得高字時余以服闋謁選初至」と『甔甀洞續稿』「夏日丘謙之兪羨長(安期の字)見訪北園」、同「方山人詩序」に見える「丘潮州謙之」などによれば、彼の字は謙之で、かつ潮州知府の任に就いたことがあるはずである。『潮州府志』の「丘齊雲、字は謙之、麻城の人、進士に由る」という記事はこれに合致する。[17]

二三七頁　「習孔敎」を「習檢討」と同じ人物と疑っているが、恐らく『研究』の指摘のように、習檢討は孔敎の父であろう。

二四八頁　『四部稿』の卷數を「百五十卷」とするが、これは現行本一七四卷の「世經堂本」とは異なる。また、二五九頁で汪道昆の「序」のみしか引用していないのも、その刊行時の説明として不足である。この點について、『研究』は已に『四部稿』が萬曆四・五年の二回にわたり刊行され、一八〇・一七四卷二種の卷數があることを指摘している。[18]

二五六頁　陸楚生を「未詳」とする。『王奉常集』「京口遊山記・上」の「陸子楚生」の句によれば、楚生は字のはずである。また、その詩部にある「中表陸楚生來京師未幾即偕談忝軍(談思重)南還」という詩題、及び「送陸元量出按廣右」・「送談忝軍還江南」の二詩が時代順に並んでいることより考えれば、楚生とは陸元量ではないだろうか。[19]

二六一頁　『小傳』「胡應麟傳」を引用して、晩年の世貞は胡の詩作に對して嫌惡感を示していたという傳聞を載せている。しかし、これは三四七頁にある、世貞が死の直前に胡を呼んで『續集』の序文と校訂の仕事を依頼したという事實と矛盾する。これもまた錢謙益の偏見の一端を示していよう。

二七八頁　歸有光の評價について、世貞の文章中に見える「近代名手」との評語しか引いていない。しかし、原文は「故より是れ近代の名手」に續けて、歸氏を世貞の評價があまり高くない韓愈・歐陽脩(特に後者)に擬し、有光の文才を「起伏と結構」に於いて缺けると言い、「照應點綴に至りては、絕えて少かるべからず、又これを琢きて痕無きを貴ぶも此れ毋し」と指摘している。文脈より見れば、この文章は二人の不仲を語るものであり、歸氏の文學上の地位を『弇州山人續稿』「歸有光贊並序」のように高く評價するものではない。

二九八頁　「方仲美」を未詳とする。『甔甀洞續稿』「方山人詩

序」によると、方仲美は曾て長期間吳國倫と共に住んでおり、從兄は「定之（方弘靜の字）司徒」、その子は「用謙」である。なお、方仲美は王稚欽と共に詩社を結成していたことが確認される。[20]

三四二頁　『弇山堂別集』（以下『別集』）を萬曆一七年に完成したとするが、『研究』は一七・一八年の閒としている。『別集』「吏部尚書表」は一八年二月の楊巍の退職にまで筆が及んでいることから判斷すれば、この書は一度編成された後、更に增訂されたことがあるに違いない。[21]

最後に、細かいことであるが、誤植と思われる文字が散見されるのが惜しまれる。例えば、四九頁一三行：山齊→齋、一六二頁七行：請執政→諸、二二〇頁一行：司冠→寇などである。史料を引用する場合、原則として世貞自身が編纂した『弇州山人四部稿』と『續稿』を、董復表の『弇州史料』よりも信賴すべきであろう。一例を擧げれば、一六五頁で引いている『弇州史料』「題葉秀才爲方氏遺裔復姓記後」の內容は、『四部稿』「題葉秀才爲方氏復姓記後」とほぼ同じであるにもかかわらず、「建文の末、天下の能く義に殉ずると名づくる者」を「建文の役、天下の能く義に殉ずると名づくる者」に改めているが、そうすると成祖側が「義」となってしまう。また、「而るに盡くはその意を意外の日に快ばすあたわざる者有り」を「而るに盡くはその意を意の外に快ばすあたわざる者有り」に改め、逆にわかりにくくなってしまっている。[22]

三　今後の新年譜編纂に對する私見並びに提案

上述のように、編年體の形式は本書の內容がより豐富になるはずであるところを制限してしまっている感がある。それを補う方法に關して、梁啓超は『中國歷史研究法補編』の中で已に示唆に富む發言をしている。つまり、譜主の死後の關係資料を「譜後」の形式で列擧し、その編年できない雜事・代表的な文章及び言論、そして重要な考證・批評を「附錄」に紹介說明すべきである、と述べている。[23]「譜後」を活用した例として最近出版された陳訓慈・方祖猷『萬斯同年譜』が擧げられる。[24]この書は譜主の死後二八七年までの關係項目を廣く集めている。これと比べると、世貞が逝去した後に關して、『研究』が二條目しか擧げておらず、「年表」が四條目しか擧げていないのは、あまりにも寂しすぎる。世貞の學問に對する艾南英・袁宏道・孫鑛・張岱・錢謙益らの批判――それらが正當なものであるか否かは別として――と陳子龍「雲閒派」への繼承、明末までの世貞の親友門客の活動、王氏一族の沒落、世貞書畫の散佚なども史實として記載すべきである。外國における世貞の影響と彼に對する評價等に關して言えば、荻生徂徠とその學派の著作と主張に觸れることは當然必要であるし、[25]いままであまり知られていない朝鮮側の史料にも注意すべきであろう。一例を擧げてみると、『朝鮮王朝實錄』宣祖三四年（一六〇〇）・光海君七年（一六一四）には、世貞が中國の「文章大家」であることを認めながら、『別集』に見える朝鮮の歷史に關する誤謬に對して嚴しい評價のなされたことが記されているし、又肅宗二八年（一七〇一）には、逆に同書の科擧についての記事を信賴できる資料として引用している。[26]このような記事も「譜後」に指摘しておくことによって、李朝における世貞の評價を他日に研究する際の良い手引とすることができるであろう。

他の年譜叢刊と比べれば、本書の體裁上の內容不足はなにも著者

一人の責任ではなく、ある程度『叢刊』の編集方針にも關係している。八〇年代から最近まで出版中である中華書局の「年譜叢刊」の體裁は、おおよそ次のように統一されている。㈠譜主の肖像畫・筆跡・著作・故鄕や遊覽した場所の寫眞、㈡「前言」で譜主の一生の紹介、及び年譜の參考文獻の解說、㈢本文、㈣「附錄」で譜主の傳記・墓誌銘・行狀・神道碑、地方誌の略傳などを網羅する。本書と比べて、中華書局のシリーズは特に「附錄」を重視して、同時代及び後世の人びとの記載より見た、譜主のイメージの變化を示そうとする意欲が見える。一方、上海古籍出版社も「中國歷史人物年譜」というシリーズを設けている。その編纂方法には中華書局と多少の異なる點がある。すなわち寫眞に續いて、譜主に對する紹介及び全體の評價の「前言」と、專ら年譜の體裁を說明する「編例」を分けたり、傳記と他人の詩文集・筆記に見える關連記事を廣く列擧して「附錄」の內容に盛り込む等、より工夫をこらしている。更に、參考文獻の版本を明記する點と人名索引は讀者に對して大きな便宜を與えるものである。『叢刊』はこれらの點において見劣りがすると言えよう。

以上、私見を述べてきた。中には評者の見誤りがあるかもしれない。著者の御海容を乞う次第である。本書に基づき、更に充實した王世貞年譜が編纂されることを期待する。

註

(1) 靑木正兒『淸代文學評論史』（岩波書店、一九五〇年）、第一・四・八章などを參照。

(2) 錢大昕『弇州山人年譜』は『洪文敏・陸放翁・王伯厚・王弇州四家年譜』（臺北、廣文書局、一九八〇年）所收。世貞に對する錢氏の評價は『潛硏堂集』（上海、上海古籍出版社、一九八九年）、卷一六、「嘉靖七子攷」、二六六―二六七頁や卷二六、「歸震川先生年譜序」、四四七頁、卷三〇、「跋宛委餘編」、五四五頁、卷三一、「跋弇州四部稿」、五六二―五六三頁などを參照。また、錢氏の門人である李賡芸の『年譜』「跋」によると、彼は「又嘗て二王氏の〝世系表〟を作ったが、殘念ながらこの「表」は現在見ることはできない。

(3) 吳晗「淸明上河圖與金瓶梅的故事及其衍變――王世貞年譜附錄之一――」（『淸華週刊』三六卷四・五期（一九三一年）、一―一七頁、後『吳晗史學論著選集』（以下『選集』）卷一（北京、人民出版社、一九八四年）所收）、三七―五四頁。その後、「江蘇藏書家史略」（執筆時期は恐らく三〇年代、後「兩浙藏書家史略」と合纂され、「江浙藏書家史略」となった。『選集』卷一所收）の注に「吳晗『王世貞年譜』（二一四頁）、「胡應麟年譜」（『淸華學報』九卷一期（一九三四年）、一八三―二五二頁。『選集』卷一所收）の參考書目に「『王鳳洲先生年譜』、未刊」等の記事を載せている（四二八頁）ただし、今見られる吳晗の著作及び張守常「吳晗著作目錄編年」（『選集』卷四（北京、人民出版社、一九八八年）、「附錄」、四六四―五〇〇頁）のリストにはこの年譜を見つけることはできない。朱星の說は「金瓶梅的作者究竟是誰」（『社會科學戰線』一九七九年三期）、五三頁を參照。

(4) 萬如文「弇州先生文學年表」、『文學年報』四期（一九三八年）、一八九―二二六頁。

(5) 徐朔方「論王世貞」、『浙江學刊』一九八八年一期、四一—五〇頁。以上本文中列擧した著作の外にも、管見の限り、王元鈞『王世貞先生年譜』や呂明『王世貞年譜訂補』、徐鑫之『重編王世貞年譜』などもあるが、いずれも未刊書である。共に謝巍編『中國歷代人物年譜考錄』（北京、中華書局、一九九二年）、三〇〇頁を參照。

(6) 章培恆主編『明代文學研究』第一號（南昌、江西人民出版社、一九九〇年）、九五—一九四頁。

(7) 拙稿「淺論王世貞的當朝史著作」、『論衡』一卷一期（一九九四年）、二三—二五頁。張慧劍『明清江蘇文人年表』（上海、上海古籍出版社、一九八六年）。

(8) 郭紹虞「明代的文人集團」（『照隅室古典文學論集』上編〔上海、上海古籍出版社、一九八三年〕所收）、五六七—五六八頁。

(9) 佐藤一郎「同鄕人歸有光と王世貞」、『漢文學會報』三一期（一九八六年）、二四七—二六四頁。

(10) 陳文燭『二酉園詩集』（萬曆一二年序刊本）、卷八、「懷高王二都閫小序」、一九A、王世懋『王奉常集』（萬曆一七年吳郡王氏刊本）、「賦詩」卷七、「送歸熙甫尹長興」、一二B—一三A。歸有光『震川先生集』（上海、上海古籍出版社、一九八一年）に載せる手紙は、卷七、「與兪仲蔚」、八八一頁及び「與王子敬六首」の五、八九〇—八九一頁である。「鳳洲行省」、「王元美自大名還」の句によると、手紙は隆慶三年前後、世貞が河南按察司副使整飭大名等處兵備の任から浙江左參政の任に移る際に書かれたものに違いない。また、錢謙益『列朝詩集小傳』（上海、上海古籍出版社、一九八三年）、「丁集・中」（四八四—四八五頁）で相當嚴しく批判された「古文辭」派の劉鳳は、その『子威先生澹思集』（明刊本）、卷四に「送歸憲副北上」二首（一三B—一四A）、卷五に「答歸憲使春見過」（一七A）及び「十七夜雨同張太史歸憲使宴司勳宅分得聞字」（一七B）を收錄していることより見れば、錢氏が尊敬していた歸氏が、當時、劉氏とどういう關係を持っていたのかも興味深い問題である。

(11) 拙著『王世貞史學研究』（香港大學哲學碩士論文、一九九二年）、第二章、四〇—四一、五〇—五四頁を參照。

(12) 黃雲眉『明史考證』卷五（北京、中華書局、一九八五年）、一六四九頁。

(13) 莫如忠『崇蘭館集』（萬曆一四年周鑑大梁刊本）、卷六、八A。瞿景淳『瞿文懿公集』（明刊本）、卷三、「送張汝玉蒞刑江南序」、三B。彭延慶等修『蕭山縣志稿』（民國二四年排印本）、卷一五、「人物列傳」二、一〇A。

(14) 陳建華『中國江浙地區十四至十七世紀社會意識與文學』（上海、學林出版社、一九九二年）、二六九—二七二頁、廖可斌『明代文學復古運動研究』（上海、上海古籍出版社、一九九四年）、二一六—二一八頁。

(15) 謝榛『四溟山人全集』（萬曆三二年趙府刊本）、卷一三、一二B。『研究』、一四四頁。

(16) 李瀚章等修『湖南通志』（光緒一一年刊本）卷一七一、三三八〇頁。

(17) 『王奉常集』、「賦詩」卷九、九B—一〇A。吳國倫『甔甀

洞續稿』（萬曆三一年季士良刊本）、「詩集」巻九、一一B、「文集」巻七、一二A—一三B。吳穎纂『潮州府志』（順治一八年刊本）、巻四、一〇A。

(18) 『研究』、九七—九九頁。

(19) 『王奉常集』、「文部」巻一〇、一A、「賦詩」巻一五、二Bと巻六、六B。

(20) 「方山人詩序」及び註(17)を參照。

(21) 王世貞『弇山堂別集』（北京、中華書局、一九八五年）、巻四七、八八七頁。

(22) 董復表編『弇州史料』（明刊本）、「後集」巻二八、一〇B—一一A、「建文之役、天下之名能殉義者」、「而有不能盡快其意於意之外者」。王世貞『弇州山人四部稿』（臺北、偉文圖書出版社、一九七六年）、巻一二九、五九八四—五九八五頁、「建文末、天下之名能殉義者」、「而有不能盡快其意於意外之日者」。ただ、『弇山堂別集』の場合は、『弇州史料』によってその誤謬を訂正できる例が少なくない。前掲拙著『王世貞史學研究』、「附表」二・三では、「史乘考誤」を例として二書の條目區分と文字の異同を校勘している（一八七—一九八頁）。

(23) 梁啓超『中國歷史研究法補編』（上海、商務印書館、一九三三年）、九二—一二五頁。

(24) 杜維運「評『萬斯同年譜』」（『憂患與史學』（臺北、東大圖書公司、一九九三年）所收）、二三三—二三九頁。

(25) 江戸時代、詩文壇における世貞と「古文辭」派の受容と批判については、松下忠『江戸時代の詩風詩論——明・清の詩論とその攝取——』（明治書院、一九六九年）を參照。

(26) 國史編纂委員會編『朝鮮王朝實錄』（ソウル、探求堂、一九七一年）、肅宗、巻三六、二八年三月、六七五頁及び四月、六八〇頁、光海君、巻九四、七年閏八月、四一三—四一五頁、宣祖、巻一三五、三四年三月、二一五頁。

一九九三年一二月　上海復旦大學出版社
A五判　三五四頁　二五元